

『竹取新聞』でも掲載している「室礼（しつらい）」**（「）**についてお聞きしていきたいと思ひます。お二人の「ひな祭り」**（「）**の、思い出を聞かせてください。

## 三月 ひな祭り

五節供のひとつ「上巳（じょうし）の節供」。

— 今回は「ひな祭り」についてお聞きしていきたいと思ひます。お二人の「ひな祭り」の、思い出を聞かせてください。

宮前 ちらし寿司や菱餅を食べたり、ひな人形を飾ったりしてました。実家はマンションでしたが、ひな人形は7段飾りで、今思えば、大事にされていたんだと思ひます。同じマンションに住む同級生の友達は男の子が多かったので、珍しがって家にひな人形を見に来ていた記憶があります。

佐藤 私は幼稚園で、飲み終わったヤクルトに折り紙を貼ったお内裏様とお雛様を作ったんですけど、母がビールケースを積んで壇を作って、それに赤い布を敷いて、そのひな壇にヤクルトのお内裏様とお雛様を飾りました。家が田舎で、農村地区だったということもあつたと思ひますが、当時ひな人形は高価で買えなくて、母もしてもらえていなかったこともありですけど、娘にはしてあげたい気持ちが強かつたんだと思ひます。



— 素敵なお母さまですね。

佐藤 なので、私と姉が作ったヤクルトのお内裏様とお雛様を一番上に4つ飾り、3人官女は日本人形、5人囃子はぬいぐるみ、並べる数だけ合わせて、家の近くで咲いている菜の花を飾って、「ほら、ひな人形だ」と母は笑いながら嬉しそうに言っていました。でも、友達には恥ずかしくて見せられないので、家の一番奥の部屋に飾っていて・・・大人になってこの話をすると母は大爆笑していました。あられも手作りで、乾燥した餅を揚げていました。今のように色々な大きさのひな人形などなく、**家にあるもので全て手づくりが我が家のひな祭りでした。**

宮前 買ってきた何かではない手作り感はお母様の想いがないと出来ないと思ひます。笑って飾ってくれるのもいいですね！  
佐藤 今は100円ショップであられも売っているけど、昔は1袋300〜400円位して、当時では相当高価だったんです。だから、あられも手作りで作ってくれていました。

宮前 うちが姪っ子がいて3、4年前に久しぶりに実家のひな人形を出しました。女の子が生まれないと活躍の場がないけど、やっぱり人形も飾られると嬉しいだろーなと思ひます。

— 私は男兄弟だったので、ひな祭りは華やかなイメージがあります。子どもの成長を願うのは、今も昔も変わらないですね！

佐藤 昔、田舎ではひな人形を持っているのは珍しく、ひな人形を買ったら、翌日には町中の人を知っている感じで、「あそこの家、立派なひな人形買ったみたい」と噂になり見に来るし、**買ったことを自慢するくらい凄いいことでした。**母は娘と一緒にひな人形を飾るのに憧れていたんだと思ひけど、準備がはじまると家中の人形を集めるのに駆り出されて、今思うと面白かつたです。

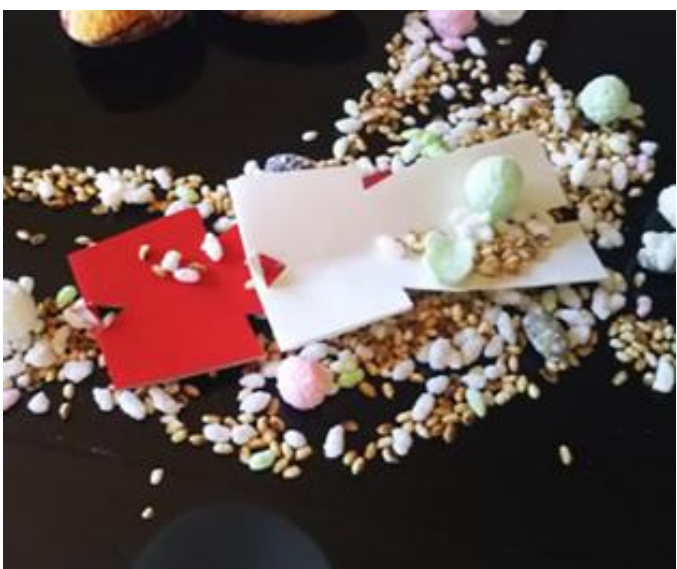
宮前 「節分」の時にも話したことですけど、室礼教室の先生も、先生が教えた通りではなくて、自分のおばあちゃんやお母さんが伝えてくれた家庭内文化、その家庭で育まれたものを大事に優先して欲しいとも言っていました。お母さんがこう言ってくれたとか、その時しか出来ないことが思い出になるから行事は大事なのだと感じます。子どもはあつという間に大きくなり、一緒にいられる時間は短いから、



宮前さん初節供の様子

こういう行事は、家族との豊かな時間を作ってくれる意味でも大事にしたいものですね。今は働くお母さんも増えたりして、家庭ではなかなか難しい時代だからこそ、園で行事をやることの意義も高まっているように思います。今と昔とでは状況が違うと思いますが、立派なひな人形もいけれど、園で子どもが作ったひな人形を大事に飾ったりするのもいいですよ。大人になっても、子どもの頃の記憶が残っているというのも行事の意義なのだと思います。これを機会に、改めて母にもひな祭りの思い出を聞いてみたいと思います！

一行事の醍醐味を改めて感じました。お話ありがとうございました。



■雛祭りは本来、人形（ひとがた）に体の穢れを移して海や川に流す「流し雛」だったということで、「流し雛」を祓い流し去る、雛祭りの原型。

■お米を炒っているのは、関東と関西では意味が異なり、諸説あるようですが、江戸時代の頃に、お釜に残ったご飯粒を天日で乾燥させて保存しておき、後日干した飯を焙って作ったり、お米を直火で炒って爆米というお菓子を作ったりするのが流行していたり、菱餅を砕いて炒ったのが起源だったりするようです。



■室礼の解説…ひなあられの川の上に、紅白の紙雛をのせ、川の流れの中に蛤を、そして川辺には美しい桃の花が咲いている様子をしつらえました。桃の花や木には、邪気を祓い、百鬼を制する高貴な花とされ、暗い冬を破って、明るい花を咲かせることから、嫁ぐ娘の華やいだ美しさに例えられていたようです。3月3日が「桃の節供」と呼ばれるのにも、単に、桃の開花時期に重なるというだけでなく、そのような背景があるからなのでしょう。あられと炒り米を混ぜたもので川の流れを表し、川には紅白の人形やちりめんの布でくるんだ「飾り蛤」などをしつらえました。

また、あられは亡くなった子どもたちを祭りに招くための道しるべであったり、昔はお釜にこびりついたおこげを洗って使い、儉約の心を教えるものでもあったそうです。サザエを雄雛、はまぐりを雌雛に見立て、「五常の徳（仁義礼智信）を大事に・・・」という祈りをこめて五色の紐を結び、盛らせて頂きました。もともとひな祭りは女の子のためのお祓い、厄除けのお祭りだけでなく、早くに亡くなった女兒への供養の意味も込められているということで、お花についても、邪気を祓い更なる成長を願う現世の女の子をお祝する「桃の花」だけではなく、亡くなった子どもへたむけるための花として、掛け軸には菜種油がとれることから燈明の変わりとしての意味を持つ「菜の花」の色紙を飾りました。

■女性の貞操の象徴ともされる、ちりめんの布でくるんだ「飾り蛤」や、三が重なることにより、三月三日を表し、ますます「米える」の願いを込めたさざえ（三三米）を盛りました。

